

医の杜から巣立つ未来のドクターたち。
心からの笑顔。彼女には夢がある。

仁の道、 仁の人へ

To Future Doctors 02

大切なのは患者さんの
生活環境や価値観を理解する心。



MASASHI KIMURA
木村雅司さん
木村内科医院副院長。
医学博士、日本内科学会認定総合
内科専門医、日本感染症学会認定
感染症専門医。

父と

また、診てもらおう…。
そう思ってもらえる医師に。

ENI KIMURA
木村絵梨さん
川崎医科大学附属高等学校1年。
木村家のひとり娘。

娘



**学んで気づいた。病気を治す
ことだけが医師の仕事じゃないと。**

その時、絵梨さんは思った。「こんなのんびりした環境から、たくさん医師が生まれるのが不思議な感じ。だって都会で医学部志望っていうと、受験勉強でカッカッしたイメージしかなかったから」。

これは、父・雅司さんの母校でもある川崎医科大学附属高等学校に父と母と三人で初めて訪れた時の、絵梨さんの素直な思い。当時、絵梨さんは横浜にある中高一貫の進学校に通う中学生。そこは、地元の開業医の子息が多く通う有名校だった。

「でも絵梨自身は、どうもしっくりこない三年間だったみたいで：確かに一学年に1000人のマンモス校ですから、当然、先生も一人ひとりの生徒まではあまり気にかけてくれない。『だったらお父さんが卒業した高校を一緒に見に行ってみるか？』それが最初のきっかけでした」と雅司さん。

そして入学して一年が過ぎた。毎日の授業や現役の医師との交流などを通じて、絵梨さんはこう思っているという。

「それまでは、病気を治すことだけが医師の仕事だと思っていました。でも、いろいろな医師の方や先生の話を聞くと、実際は患者さんとコミュニケーションを取って心の面でも支えている。そう思って、改めて父が働く姿を見たら、『将来、自分は父と同じようにできるんだらうか？』と：医師としての父の偉大さが分かった気がします」。

**父と母が出会った街で学ぶ。
娘の夢は家族の夢。**

ひとり娘の絵梨さんを、静岡から遠く岡山の地に送り出すことへの葛藤。絵梨さんは中学の時も寮生活だったが、雅司さんは毎週のようにクルマで会いに行っていたという。

「私自身、当校を訪れるのは三〇年ぶり。環境もさらに整備されて、相変わらず先生方の意識も高い。それと寮の食事がおいしかった（笑）。一品一品、作り手が愛情を込めて作ってくださっているのが分かります。私が在籍していた頃からの先生もいらっしゃるし、静岡と岡山、離れてはいますが安心ですね」。

雅司さんは、絵梨さんが幼稚園の時に書いた七夕の短冊の、「お医者さんになりたい！」の文字が今でも忘れられないという。その時は、「ホントかな？ 絵梨はいつも調子いいから（笑）」と思ったが、心からうれしかったそう。

「絵梨には、患者さんの心を理解する医師になってほしい。そのためには、まずきちんと話が聞けて冷静に対処できる人間性が大切。それがあれば技術もさらに生かれますから」。

ちなみに雅司さんと奥さまは、雅司さんが川崎医科大学一年の時に出会ったそうだ。「主人と出会った倉敷、三〇年後に娘と三人で再び訪れるとは：。人生の輪廻というか不思議なめぐりあわせを感じます」。父と母と娘。これからも夢を共有して歩き続ける。